興業花火の失敗

煙火業者が興業的に手を出すのは大変難しいということを知らされた経験が二度ある。一度は昭和二十四年頃後楽園球場で開いたバレーと組み合わせた興業花火である。バレーのほうは小牧バレー団を頼み、入場料は大人百円、子供五十円。都電、都バスにも車内広告を掲載するなど宣伝を十分したので、満員にならないまでも一万人は入るだろうと胸算用をしていたのだが、フタをあけたら入ったのはわずか二百人くらいであった。人気がなかったわけではない。その証拠に〝場外〟は満員だったのである。花火は高く揚がるものもあるから球場の外からでも十分楽しめる。バレーはともかく、花火だけはタダで見物できるのだから、入場しないチャッカリ組が多かったというわけで、そこに全然気がつかなかったのはうかつだった。結局バレー団と後楽園の費用その他で合計三十万円を当社が負担する始末になった。花火代のほうも含めれば大赤字であった。

後楽園での失敗から数年たって、今度は読売新聞と大森海岸の平和島温泉で競艇場を使って花火興業をやることになった。読売新聞なら催しにも慣れているし、花火の合間に島倉千代子が歌を唄うということも呼物にしているので、成功するだろうと思いながら準備を進めたのであった。競艇場には高さ七メートル、幅七十メートル位の仕掛花火の足場が地元の鳶職によって建てられていた。そして仕掛花火をトラック五、六台で運び、それを水面に建てられている足場に取り付ける作業を、こちらの従業員十人ほどで進めていった。遅い夏の日がそろそろ暮れようとしていたとき、強い南風で足場の南端が仕掛花火もろとも倒れ始めたのである。全部連結している足場だからたまらない。半分以上は水中に浸ってしまった。これを直していたらとても間に合わない。そこで主催者が集まって相談し、急拠中止することにした。入場者はかなり増え出し、島倉さんにはもう歌ってもらっていたが仕方がない。入場料を払い戻しする木戸に入場者が殺到するなどの大騒ぎとなったが、読売新聞と共催の形だったので仕掛花火は全部駄目にしたほか、足場建設費はこちらもちとし、他はいっさい新聞社側で負担ということで、被害はたいしたことがなかったように記憶しているが、それにしても大失敗であった。砂上の楼閣ならぬ水中の足場について倒れないように支線などもっと厳重にすべきであったことを反省している。